

# IYC Closing Ceremony

日本化学会常務理事 川島信之

世界化学年（IYC）の Closing Ceremony が 2011 年 12 月 1 日、ブラッセルで行われた。BASF、Dupont、Dow をはじめとする世界の大手化学企業トップ、米国化学会、中国化学会、日本化学会など各国化学会、CEFIC（欧州化学連盟）、日本化学工業協会など化学工業団体の代表など 1000 名を超える関係者が参集、IYC の総括と継続的活動の必要性が訴えられた。

IYC はマリー・キュリーのノーベル化学賞受賞 100 年を記念して UNESCO と IUPAC が定めたもので、マリー・キュリーが研究生を送ったパリで開催した Launch Ceremony でキックオフし、世界各国で化学の重要性、次世代を担う若手研究者の育成などを目的とした 2000（わが国は世界 3 位）を超えるイベントが開催された。

今回、Closing Ceremony 開催地のブラッセルは 1911 年にマリー・キュリーやアインシュタインなど多くの科学者・化学者・企業人が出席した「Solvay 会議」が行われた都市で、セレモニーも旧市街の中心地にある SQUIRE Brussels Meeting Center で行われた。



SQUIRE Brussels Meeting Center

閉会式はベルギーのフィリップ皇太子の開会宣言で開幕、来賓挨拶のあと Maire Geoghegan-Quinn EU Commissioner for Research が EU の科学技術政策に関する「Horizon 2020」の概要を報告、エネルギー、健康、食糧、輸送などの分野で、化石資源に依存しない原料転換、Smart & Green、新規機能材料、ナノテク、バイオの研究を支援することを示し、アカデミアや産学連携への支援だけでなく、研究をパイロットからラージスケール、製造へ早く移行するための産業界への支援の重要性を強調した。

また BASF、GSK、Solvay、Dupont、Dow などから選出された若手 12 名の Young Leader による「The World in 2050」で、

2050 に達成している姿を予測、科学技術や政策のマイルストーンを示した。「By 2050, we all have access to healthy, safe and fulfilled lives in symbiosis with our planet. Chemistry is everywhere and Chemistry is for everyone.」を 2050 年に向けてより良い世界を作るためのキーワードとして掲げ、産学官の本気の連携、社会連携、コミュニケーション、ナレッジの共有化、教育の重要性を訴えた。このほか 2009 年ノーベル化学賞受賞者 Ada Yonath 博士ら多くの講演者が化学の未来へ向けた提言を行った。



開会宣言をするフィリップ皇太子

最後に、UNESCO の Prof. Maciej Nalecz/Director of Basic and Engineering Sciences が、オフィシャルにクロージングを宣言したが、「IYC をクローズすることにはためらいがある。ここで IYC のフォローアップを開始することを宣言する」と世界にフォローアップ活動を継続的にやっていくことを要請した。



"The World of 2050"



1000名を超える関係者が参集